



想像力のスイッチを 入れよう

ジャーナリスト 下村健一

「想像力のスイッチを入れよう」(五年)は、新教材の説明文。筆者は、ジャーナリストの下村健一さんです。報道アナウンサーとして、長くマスメディアで情報を伝えてきた下村さんに、この文章の意図、子どもたちにメディア・リテラシーについて教える際のポイントをお聞きしました。

「想像力のスイッチ」

——タイトルにある「想像力のスイッチ」という言葉は、文章中で繰り返し使われるキーワードですね。

ええ。この文章では、情報を受け止めるときに大切にしてほしい四つの「想像力のスイッチ」を挙げています。つまり、①「事実かな、印象かな。」②「他の見方もないかな。」③「何がかくれているかな。」④「まだ分からないよね。」の四つです。これは、四半世紀にわたる、報道の世界での僕

「ずっと白紙のまままでいるっていうことじゃないんだ。『今日のところはこう思う』っていう、今日の判断はしていいんだよ」。

大切なのは、今日の自分の見方によって、明日の自分の見方を縛らないこと。先人観で新しい情報を排除せず、日々柔軟に見方を変えていっていい。四つ目のスイッチ「まだ分からないよね」というのは、そういう意味なんです。それが分かると、子どもたちは安心した表情を見せてくれますよ。——「まだ分からないよね。」は、判断を固定しない姿勢を指しているのですね。

そう、窓を閉じず保留せよ、と。その意味では、④「まだ分からないよね。」は、四つのスイッチの中ではちょっと異質といえます。他の三つ、つまり、①「事実かな、印象かな。」②「他の見方もないかな。」③「何がかくれているかな。」は、情報を吟味するときの具体的観点ですから。文章中でも、「いちばん大切なのは」と

の体感から生まれたもの。情報の真偽を見極めるには、それなりの予備知識がなければ無理だとも思えるかもしれないけれど、そんなことはない。知識がなくても、この四つのスイッチが分かっていたら、少なくとも情報をうのみにすることは避けられます。

ただ一方で、常時このスイッチをオンにして情報を精査していたら、きつと、へとへとになってしまう。だから、「これって、どうなんだろう?」と思ったときだけに自分で考えるように頭を起動すればいいんです。必要なときに、オフからオンに切り

強調して、真打ちとして④を最後に挙げました。実際には④は、①②③それぞれの観点で考え始めるときにも、必ず頭の中をよぎっている言葉なんですよね。最後に置いたのは、《完》ではなく《続く》だよ、という僕のメッセージです。この文章をもとにメディア・リテラシーについて学習するときには、④を、常に意識する基本姿勢として捉えてもらえたらと思います。

メディアの側の努力

——この説明文は、子どもたちがメディア・リテラシーを学ぶきっかけになりそうですね。

そうなってくれたらいいなと思います。ただ、危惧していることもあるんです。それは、この文章を少し捉え違った子どもたちが、「メディアは全て疑え」と全否定に向かってしまうのではないかとということ。これは情報をうのみにする、つまりメディ

替える。そういうイメージで、「スイッチ」という言葉を僕は使っています。

——下村さんは、小・中学生を対象にメディア・リテラシーの授業をされることもよくあるそうですね。子どもたちからたびたび出る質問には、どんなものがありますか。

いちばん多いのは、「いったい、いつまで『まだ分からないよね。』と考え続けられるのか」という質問ですね。それでは最終判断ができないじゃないか、と。それに対しては、こう答えています。

アを無批判に全肯定することの対極にあるようであり、実はまったく同じ態度の裏表だといえます。メディア・リテラシーは、自分の頭で考えて判断できる人を育てるためのもの。考えずに全否定する人を生み出してしまったら、なんの意味もありません。これは、強烈に大事な点だと思っています。だから文章では、「メディアも大丈夫とたくらんでいるわけではない」ということも伝えたいと思いました。メディアの側も努力をしている。でも、それでも情報を受け取る側との間にコミュニケーション不全が生じてしまうことがある。それを防ぐために、情報を受け取る側も努力する必要があるのだということ。それを伝えようとしたのが最後から二段落目です。メディアの側にいた僕が説くメディア・リテラシーの特徴が表れた部分ともいえるかもしれません。

「メディアは皆、うそつきだから信じるな」という狭い結論に向かってしまわない



先生方へのメッセージ

——この文章で、これから授業をされる先生方へのメッセージをお願いします。

小さい窓から小さい景色を眺めるのではなく、大きな景色を眺める楽しさを味わってほしい。これは、文章の最後にも書いたことです。子どもたちには、全体像を見渡す想像力をもってもらいたいのです。そのためにも、授業の際にはぜひ、単なる「文章の読解」にとどまらず、題材となっているメディア・リテラシーそれ自体への理解も深めてもらえたらいいなと願っています。

「四つのスイッチを働かせるようになってから、メディアの見方が、そして世界の見方がちょっと変わった」。これを学んだ子どもたちに、いつかそう言ってもらえたら、こんなに幸せなことはありません。



下村健一

東京都生まれ。ジャーナリスト、市民メディア・アドバイザー。東京大学卒業後、TBSで現場リポーター、アナウンサーとして活躍。退社後はフリーキャスターの傍ら、市民によるメディア制作を支援する活動を開始。2010年から2年半、内閣審議官（満了後は契約アドバイザー）として民主・自民3首相の情報発信を担う。現在、慶應義塾大学特別招聘教授、関西大学特任教授、白鷗大学客員教授。

大きな景色を眺める楽しさを ぜひ味わってもらいたい。

ように、子どもたちには、この部分もぜひ大切に読んでもらえたらと思っています。

——「メディアの側の努力」という言葉がありました。具体的には、メディアの側はどんな努力をしているのでしょうか。

メディアの側は、中立・公正に近づくよう、より偏りなく、より正確に情報を発信すべきだし、実際、現場はその努力を続けています。具体的には、「明確さ」「正確さ」「優しさ」「易しさ」。この四つが、メディアの側に必要な努力と責任であると、僕は思います。詳細は、拙著『10代からの情報キヤッチボール入門』（岩波書店）でご説明しているのですが、ここでは簡単に——。

「明確さ」は、「何を伝えたいのか」をはっきりさせ、情報発信のしかた・内容・表現

を鮮明にすること。「正確さ」は、イメージの決めつけやミスリードを招かないよう、記述を研ぎ澄ますこと。「優しさ」は、無意識にでも誰かを傷つけないよう気遣うこと。「易しさ」は、伝える相手が理解できるように、分かりやすく表現すること。

ところで「メディアの側」というと、放送局や新聞社などのマスメディアを連想しがちです。でも今の時代、これらの努力は、実はマスメディアだけに当てはまることじゃない。SNSなどで情報を発信する人なら、誰にでもいえることです。遠からず、子どもたち自身もこの「情報を発信する側」に立つことになる。小学校五年生向けの文章なので、そこまでは書きませんが、したが、そんな責任をちょっとでも感じてもらえたら、筆者としてはうれしいです。

メディア・リテラシー 授業のポイント

小・中学生から大人まで、幅広い世代を対象に、メディア・リテラシーを教える授業をされている下村さんに、その授業のポイントをご紹介します。

●「生の素材」を通して

メディア・リテラシーは、メディアと接しているそのときに、その現場で考えることではちばんよく身につきます。では、その「現場性」を学校で再現するにはどうしたらいいか。僕は、「生の素材」を取り入れることをお勧めしています。

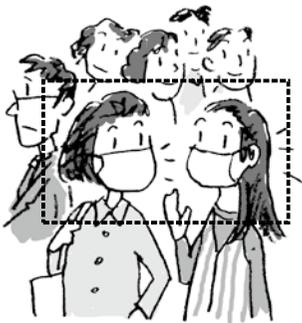
生の素材とは、実際にメディアから発信されたニュースのこと。それらを教室に持ち込んで、みんなで「想像力のスイッチ」を入れる練習をします。教材に最適なニュースを予知して録画するのは困難ですが、自宅のテレビでいいシーンに出会ったら、それをスマホで撮って静止画として子どもたちに見せるのか——。そんなことを少し意識するだけで、使える素材は集まるものです。

●知識の有無を問わずに

「想像力のスイッチ」を入れる練習

習をするときに大切なのは、知識がなくても情報はある程度見極められる、と実感できること。ですから、教材には、予備知識がある子もない子も等しく理解できるようにニュースを選ぶ必要があります。

例えば、以前、三つ目のスイッチ『何がかくれているかな。』について説明するために僕が選んだのは、「韓国でのMERSの感染拡大」を伝えるニュース映像の一場面。「感染拡大」のニュースだから、メディアは、警戒してマスクをしている人にスポットライトを当てて映し出す。で



も実は、その周りには、それ以上にたくさん、マスクをしていない人がいる。こうした教材なら、特別な知識はいらないうし、実際に写真で人数を数えて確かめることもできます。

●身の回りの出来事から

子どもたちが実感をもちやすいよう、身の回りの出来事から素材を見つけるのもよい方法です。例えば、二つ目のスイッチ『他の見方もないかな。』で使ったのはこんな例文。落ち込む友達の様子を見て来た子が、級友たちにそれを報告する場面。

・ほほ笑んでくれたけど、目は赤かった。
・目は赤かったけど、ほほ笑んでくれた。

両者は同じ内容ですが、情報発信者が選ぶ語順しだいで、受け手の印象はずいぶん変わります。こうした実例を使って「だから一つの情報で即断せず、他の見方もないか想像しようね」と説くと効果的です。

下村健一さんには、2014年にもお話を伺っています。そのインタビュー記事は、小社ウェブサイトに掲載中です。こちらもぜひご覧ください。
光村図書ウェブサイト>小学校 国語>作者・筆者インタビュー>下村 健一